

鹿児島県民の価値志向性の研究 (1)

クラックホーン・原式価値志向性調査票にもとづ
く県改良普及員の県民に関する描映像の調査分析

脇 勝 嘉*

A Study on Value-Orientations of the People of Kagoshima Prefecture (1)

～An Analysis of Agricultural and Home Agents' Pictures
of the Inhabitants in their Charge Districts based on
Kluckhohn-Hara Value-Orientations Schedule～

Katsuka WAKI*

目 次

1. F・クラックホーン教授の価値志向性の多様性理論の概説	102
1.1. 価値及び価値志向性について	102
1.2. 価値志向性の分類表	103
1.2.1. 人間性志向について	103
1.2.2. 対自然志向について	104
1.2.3. 時間志向について	104
1.2.4. 活動志向について	104
1.2.5. 人間関係志向について	105
1.3. 価値志向性調査票	105
2. 調査手続	106
3. 結果	106
3.1. 地域別項目別選択肢の選好順位の規則性の検定	107
3.2. 地域別項目別選択肢の一対比較法による順位の検定	108
3.3. 価値志向領域別の選択肢選好順位のパターンの検定	109
3.4. 地域社会(群)間差異の検討	110
3.5. 各価値志向次元における鹿児島県民の位置	111
4. 要 約	113
5. 図 表	115

* 鹿児島大学教育学部

1. 価値志向性の多様性理論の概説

1.1. 価値及び価値志向性について

価値についてはいろいろの対立的な考え方がある。その1つは客観主義と主観主義である。

前者は価値はある特定の対象または対象の属性であるとする考え方であり、後者は欲求、願望、選好、態度などと同じく主体の側の要因であるとする考え方である。第2は価値を規範的なものとする考え方とわれわれの欲求、願望等に伴っている存在概念であるとする考え方である。ここでは断定を保留して、C. クラックホーン教授の価値の定義をかかげるにとどめたい。

“価値（の本質）はいろいろの欲望のうちにあるのではなくて、むしろ望ましいもの（こと）の中に存する。すなわちわれわれの欲望の対象のみでなく、われわれが自他のために願望することが公正至適であると感じるもの（こと）の中に存する”，“価値とは行為者が行為の様々なやり方、手段目的の中からあるものを選択する際、彼に影響を与えるところの‘望ましいもの（こと）’に関して、個人または集団が抱懐している明白なあるいは暗黙の概念である。”

F. クラックホーン達は前述の価値に関する C. クラックホーンの定義の線にそって、価値志向性 (Value-Orientations) に関して次のように述べている。

文化について相対（多様性）観をとっているが、文化の問題を考究する一つのアプローチとして価値志向性の多様性を問題として採り上げた。次に彼等は例えば経済、政治、宗教、知識、芸術、職業というような社会学者のいわゆる社会的制度のかわりに行動領域ということばを使用しているが、この行動領域と価値志向性とは相互的關係にあるといている。すなわちその価値志向性の順位づけに独特なものがある人々は特定の行動領域に優位な地位を与えるだろう。同時に特定の行動領域が優位であることは価値志向性の順位づけの独特性を示すものであるということができる。しかし価値志向性の方が文化のより一般的持続的な側面であるので、その順位づけの方を重要視することは正しいとのべている。

さて価値志向性というのは前述の諸行動領域の一つ一つに対して、あるいはそれらの組み合わせたものに対して“複雑な、しかしはっきりと序列がついている原理であって、それは人々が誰でも当面する問題を処理解決する際に作用する評価過程の三作用（認知、感情、指令）の相互作用からその結果として生ずる。もっと簡単にいえば、認知的要因と感情的要因は人々の価値体系に内容を提供するものであるが、指令的要因は提供された内容を整序する過程である。これらの原理は文化が異なるにつれて種々様々であるが、それは文化を構成する諸部分をどのように順位づけるかという点においてだけ多様であるのである。”（今一つ価値志向性の意識化の程度の次元において多様性が存している。）

F. クラックホーン達はその研究に当って次の4つの基本的仮定を前提した。

- (1) 価値志向性の体系には規則的な多様性が存している。
- (2) すべての時代のすべての人々が何らかの解決を見出さなければならない人間に共通な問題

は数多く存在するが、しかし無限ではない。

- (3) またその解決法も多種多様ではあるが、それも無限に多いとかあるいはでたらめでもなく、明らかに一定範囲内で多様なのである。
- (4) 可能な解決法のすべてはすべての時代のすべての社会に存しているのであるが、どの解決法を選択するかは社会によって異なっている。あらゆる社会には支配的な価値志向性と多数の副次的価値志向性が存在している。のみならず、それぞれの価値志向性にはいくつかの可能性（選択肢）があって、選択肢の選択には順位が存している。

1.2 価値志向性の分類

価値志向性の実証的調査は F. クラックホーン教授達によって、ニューメキシコ州のリムロック（仮称）という60哩平方の地域において主として農業に従事している5つの異なった文化をもつ集団について実施された。

彼等は前記の4つの基本的仮定に立って人間に関して共通普遍的な問題は次の6つに集約できるといっている。

- (1) 人間本来の性質はどんなものであるか。(人間性志向性)
- (2) 人間の自然（及び超自然）に対する関係はいかなるものであるか。(人間—自然志向性)
- (3) 人はその生活の焦点を時間の次元のどこにおいているか。(時間志向性)
- (4) 人間の活動の態様 (modality) はどうあるか。(活動様式志向性)
- (5) 人々の他の人々に対する関係の態様はどうあるか。(人間関係志向性)

以上の5問題の他にいま一つの共通問題がある。それは空間概念及び空間における人間の位置の問題である。しかしこの問題及びその変動の範囲は、現時点では、われわれの分類表に含める程十分には研究されていないとのべている。

F. クラックホーン等は価値志向性を表1に示すように分類している。

表1 5種の価値志向性と志向性ごとの変動の範囲

志 向	変 動 の 範 囲					
	悪		善 悪 混 有		善	
人 間 性	可 変	不可変	可 変	不可変	可 変	不可変
人 と 自 然	自然への服従		自然との調和		自然の征服	
時 間	過 去		現 在		未 来	
活 動	Being		Being-in-Becoming		Doing	
人 間 関 係	縦		横		個人主義的	

1.2.1. 人間性志向について

人間性はこれを理論的には三つに分類することができる。すなわち人の性は本来(1)善である、

(2)悪である, (3)善であるとともに悪であるという三つである。この第3の見方は一つの範疇ではなく、二つの範疇であるということもできるだろう。確かに人の性に関する無記観と善悪兼有観とは重大な差異がある。その上、人性は変り得るという考え方と変更は不可能であるという考え方を加えて分類すると6つの範疇を立てることができる。

1.2.2. 自然(超自然をふくむ)志向性について

これには、(1)自然への服従、(2)自然との調和、(3)自然の征服の3つの立場がある。

最初の立場は人間の無力、自然の優位を信ずる宿命論である。合衆国西南部のスペイン系アメリカ人がそのよい例である。典型的なスペイン系アメリカ人の羊飼いは、つい25年前まで、大暴風が襲来する時はその土地なり家畜を保護し保全するのに人間のなし得ることは余りないか、または全然ないと固く信じて、この不可避の運命を文句なく受け容れていた。第2の立場は中国の歴史の多くの時代に有力であった。そして日本文化においても歴史的にまた現代においても有力な考え方であると思われる。第3の立場は大多数のアメリカ人の間に有勢な考え方である。

1.2.3. 時間志向性について

すべての社会にはその過去、現在、未来について特有な考え方がある。過、現、未のいずれに重点がおかれているか、その順位のつけ方においてそれぞれの社会は異なっている。この順位が判明すればその社会なりその部分集団について極めて多くのことを知ることができ、かつその内部の変化の方向について多くのことを予測できる。

F. クラックホーンによると、スペイン系アメリカ人は現在を最優位においている。歴史的中国は過去を最も重視した社会であった。近代欧州諸国(英国でさえ)もまた過去重視の傾向が強い。アメリカ人は世界の大多数の国々の人々よりも強く未来に重点をおいている。

1.2.4. 活動志向性について

人間の活動の態様は、(1) Being (ある, 存在), (2) Being-in-Becoming (なりつつある, 生成しつつある存在), (3) Doing (なす, 行なう) の3つに分類できる。

このような分類は大部分哲学者達がずっと以前に立てた Being と Becoming からとってきたものであり、更にある程度チャールズ・モーリスが設定した人格の要素の分類に近いものである。モーリスのディオニソス型成素というのは現在のいろいろの欲望を解放してその充足にふける型であるといわれるが、それはある程度われわれの Being 態様に類似している。更に彼のいわゆるアポロ型成素は熟慮と超脱によっていろいろの欲望を抑制し統御する人格傾向をもっている型であるが、それはわれわれの Being-in-Becoming 態様に若干類似している。最後に彼の能動的努力的なプロメシウス型成素とわれわれの Doing 態様との間にもいろいろの類似点がみとめられるとのべている。この活動志向性の中心点は専ら人がその活動において自己をどのように表現するかその表現様式の特徴に存している。

Being 志向性においては人格の生得的傾性と考えられるものの発露した活動が優先的に選好される。それはさまざまな衝動や欲望が活動に自発的に発露したものであるともいうことができよう。Being 志向性では発達発展ということをそれ程重視していないが、Being-in-Becoming 志向性においてはそれが最も重要である。この志向性では綜合統一された全体としての自我の全側面の発達発展を目標とするような活動を重視する。Doing は特にアメリカ社会の主要な志向性であるが、その最も顕著な特徴は外在的標準によって測定できる業績となってあらわれるような活動である。

1.2.5. 対人関係志向について

この志向性は縦、横、個人主義的対人関係の3つの下位範疇にわけることができる。

個人主義的対人関係志向では個人の自主自律性が強調される。個人の自主性は最も極端な協同社会（ゲマインシャフト）においてすら容認されていることがわかっている。しかし大抵の場合ゲマインシャフト型集団がさまざまな人間関係を整序するのに必要とする確定した慣習の制限内で“個人性”（個人中心の考え方、行動）へのかなりの傾向が許容されるのが実状である。

横の人間関係への志向性もまたすべての社会において存在している。個人は必ずある社会の一員として存在しており、そこに必然的に発生する社会集団の中の一つの型は横に広がった人間関係から生ずる集団である。生物学的に言えば、兄弟姉妹関係が横の人間関係の原型である。

上述したとおり、これら3種の人間関係はすべて社会に存するものであるが、それらが重視されるされ方は社会によって差異があり、それに即応してその社会なり集団の目標の性格及びその優先順序に重大な差異が生じている。個人主義的原則が優勢な社会集団では、特殊な縦の集団なりあるいは横の集団の目標を抑えて、個人の目標が最優先性をもっている。その意味は各個人の社会全体に対する責任と地位は全く縦あるいは横の部分集団とは無関係であるという意味において、自主自律的なものとして組み立てられる目標（あるいは役割）によって規定されるということである。横の原則が優位性をもつ場合は、横に広がった集団の目標と福祉が最優先される。このような場合の集団は常に他の類似した諸集団からは適度に独立している。縦の原則が優勢な場合には、同じく集団目標が優位性をもっているが、しかしその他に時間的連続性ということが一つの最も重要な目標である。その集団が断絶することなく永続することと集団内における地位の秩序立った継承ということが決定的な関心事である。更に縦の原則が優勢な社会集団ではどこでも、いろいろの役割もまた代表的なものである。しかしそれは常に秩序立った階層組織における一定の地位と関連したものであるという点において、横の人間関係におけるものとは異なっている。

1.3 価値志向性調査票

F. クラックホーン 達は前述の分類のうち人間性志向を除いて、他の4志向性を調査するため22問からなる調査票を作成した。国際基督教大学の原喜美氏はこれを翻訳修正して23項目からな

る調査票*を發表している。これらの調査票は各項目に設けられている2乃至3つの選択肢について下記の二様の回答を求めている。

(1) あなたはどの選択肢がよいと思うか。順位をつけて下さい。(2) あなたの町や村の大多数の人びとはどの選択肢がよいと思っているとあなたは考えるか、順位をつけて下さい。

本報告は原氏の調査票を借用した。表2は調査票の23項目を志向性別に整理したものである。

表2 調査票項目の価値志向性別分類

自然志向性(N)	時間志向性(T)	活動志向性(A)	人間関係志向性(R)
(4) 稲の病虫害	(3) 子供のしつけ	(1-1)職場の選定	(2) 橋の新架設
(6) 神仏や自然との関係	(5) 未来への期待	(1-2)職場の選定	(7) 不作時の援助
(11) 田畑の使用法	(9) 新工場の建設	(16) 生活への希望	(8) 家の新築に際して
(14) 自然に対する考え方	(12) 人生観	(17) 農場管理法	(10) 代表者の選定
(18) 人間の寿命	(15) 冠婚葬祭	(19) 家事管理法	(13) 雇人なしで働く時
	(23) 共同灌漑	(20) 農閑期の過ごし方	(21) 動産の相続
			(22) 不動産の相続

注1 () 内の数字は調査票の項目番号。

注2 項目9はクラックホーンの調査票にはない項目である。

2. 調 査 手 続

調査期間 昭和42年10月～12月

調査対象 下記139人の県庁職員（有効回答者数）

(1) 地域農業改良普及員 77名, (2) 生活改良普及員 62名

調査票 前述のとおり原氏の価値志向性調査票

実施法 郵送法。一部の農業改良普及員にはその普及方法研修会出会中に実施した。

回答は前述のとおり各項目に設けてある2～3個の選択肢について(1)調査対象者自身の意見と(2)対象者が担当する地区の大多数の人々の普通一般的な意見であると考えられるところを順位で示すことになっている。本報告は(2)の資料を整理分析したものである。

鹿児島県の各市郡を表3に示すとおり類別し、それをG₁……G₆の記号で示す。

3. 結 果

調査資料（回答）の整理、分析は下記の著書に示されている方法に従って行なった。

Kluckhohn, F. R. and Strodtbeck, F. L.; Variations in Value Orientations. pp. 121-137

A 地域（群）内規則性の分析

その地域内において、被調査者達がある1項目の2乃至3つの選択肢に与えた順位に一様性が存しているか否かの検討である。この検討は更に次の3方法によって行なわれる。

* 原喜美：日本人の価値指向に関する研究 (1), 1 CU 教育研究 IV, 1957, 12. pp. 163～200.

表3 地域別と有効回答者数

地 域		男	女	計
G ₁	鹿児島市, 郡 指 宿 郡	4 } 7 3 }	3 } 7 4 }	7 } 14 7 }
G ₂	川 辺 郡 日 置 郡	8 } 17 9 }	6 } 7 1 }	14 } 24 10 }
G ₃	薩 摩 郡 伊 佐 郡	6 } 7 1 }	7 } 9 2 }	13 } 16 3 }
G ₄	出 水 郡 始 良 郡	6 } 17 11 }	6 } 15 9 }	12 } 32 20 }
G ₅	曾 於 郡 肝 付 郡 熊 毛 郡	7 } 9 } 19 3 }	7 } 7 } 16 2 }	14 } 16 } 35 5 }
G ₆	大 島 郡	10	8	18
合 計		77	62	139

注1 鹿児島市以外の市は郡に含めてある。

注2 郡間の比較を行なうには回答者数が少ないので、技術改良普及課の助言にもとづいて、表のようにまとめた。

A.1 項目ごとにその2乃至3つの選択肢が、それぞれの地域の被調査者達によって、平等に選好されているかどうかの検定。

A.2 地域別項目別に選択肢の一対比較法による選好順位の差異の検定。

A.3 地域別価値志向性別の全項目を通じて選択肢の選好順位の差異の検定。

B 地域（群）間差異の検定。

これらの検定法の詳細は結果の各文節で解説する。

3.1. 地域別項目別選択肢の選好順位の規則性の検定

検定の手続きは次のとおりである。

- (1) 地域別に項目選択肢ごとに順位の和 (S_o) を求める。
- (2) 各選択肢は平等に選好されている（各選択肢の順位には差異はない）という帰無仮説のもとにおける選択肢ごとの期待値 S_e を求める。
- (3) $\sum D^2$ を求める。 $D = S_o - S_e$
- (4) M. Kendall の一致度測定のための S 値の表によって $\sum D^2$ の有意性を判定する。もし $\sum D^2$ が5%水準の S の値より大であれば、3選択肢の選好順位には差異はないという帰無仮説を棄却する。すなわちその地域の大多数の住民はその項目の3選択肢 (A, B, C) のうち何れか1つ乃至2つの選択肢に他の2乃至1選択肢よりも高い順位を与えていると被調査者達は思っている。

表4 選好順位に規則性のある項目及び地域数

地域数 \ 志向性	自然 (5)	時間 (6)	人間関係 (7)	活動 (5)
6	2	4	4	
5	1	1		
4		1	1	
3	1			
2				1
1	1		2	
0				5

注 カッコ内の数は項目数、活動志向系列には2つの立場についての質問をふくんだ項目が1つある。

ることができる。

後に提示してある表5.1は自然志向性、表5.2は時間志向性、表5.3は対人関係志向性の各項目ごとに、地域別に検定の結果を示したものである。選択肢選好順位に規則性がみとめられる項目及び集団の数をまとめたものが表4.である。

表5.1の項目6(神仏や自然と人間との関係に関する項目)には人間の自然

への服従(A)、自然との調和(B)、人間による自然の征服(C)、の3選択肢が設けてあるが、これら3選択肢の選好順位には G_4 (出水郡、姶良郡)では1%水準で、 G_1 (鹿児島市郡、指宿郡)と G_2 (川辺郡、日置郡)では5%水準で有意な差がある。すなわち3選択肢のうちあるものは高く、あるものは低く順位づけられていて、三者の選好順位は等しくはない。 G_3 (薩摩郡、伊佐郡)、 G_5 (曾於郡、肝付郡、熊毛郡)、 G_6 (大島郡)においては3選択肢の選好順位に有意な差はない。換言すればある1乃至2選択肢が残りの2乃至1選択肢よりも特に高い順位を与えられているということはないといえる。その他の項目については説明を省略する。

3.2 地域別項目別選択肢の一対比較法による順位差の検定

ある項目の選択肢をA, B, C, で表示すると、検定の手続きは下記のとおりである。

(1) AB, AC, BC の各対において一方が他方より順位が高い度数を数える。等順位の場合は0.5とする。

(2) 各対の2選択肢の順位には差はないという帰無仮説を立てる。すなわち、それぞれが選好される比率 $P=0.5$ と仮定する。

(3) この仮説を5%の水準で棄却するに必要な人数 $[F(A>B)]$ を次式によって算出する。

$$F(A>B) = Z\sqrt{mPq} + m/2 + 0.5 \quad \dots\dots\dots(1)$$

Z 正規分布における $P=0.05$ の値

m 調査対象者数

0.5 連続のための修正値

P, q それぞれ選択肢A, BをB, Aより選好する者の期待比

この検定の結果にもとづいて選択肢A, B, Cの間の関係を次のように表現できる。この記号表現法において $A>B$ はBよりAに高い順位を与えたものがBのそれよりも5%水準をもっと多いことを示す。 $A\geq B$ はAの方を選好したものがより多いが、両者の差は有意ではないことを示す。

(1) $A > B > C$ $A > B, A > C, B > C$ の3つの関係がすべて5%乃至それ以下の水準で成立する場合である。

(2) $A \geq B > C$ $A > C, B > C$ は5%水準で成立するが、 $A > B$ は5%水準に達しない場合である。

(3) $A > B \geq C$ $A > B, A > C$ は5%水準で成立するが、 $B > C$ は5%水準に達しない場合である。

(4) $A \geq B \geq C^*$ $A > C$ の関係だけが5%水準で成立する場合である。

(5) $A \geq B \geq C$ どの比較も5%の水準に達しない場合である。

(6) $A > B = C$ この表示の $B = C$ は B と C の選好度数が全く等しいことを示す。

調査資料に基づいて上述の観点から地域別に、各志向性の項目別に2選択肢間の選好度数を示したのが表6.1.1～表6.1.4であり、検定の結果を前述の記号表現法を用いて示したものが表6.2.1～表6.2.4である。

表6.1.1及び表6.2.1の項目4に関する G_1 の資料を一例として説明すると、この項目は稲の病虫害に対して服従的な態度 (A) と調和的態度 (B) と征服的態度 (C) をどのような順位でとると思うかという質問である。表示のとおり B より A に高い順位を与えたもの12人、 C より A を選好したもの2人、 C より B を選好したもの1人である。 G_1 の人数は14人である。式(1)によって算出した5%水準の $F(A > B) = 11.5$ または2.5である。従って G_1 の選好順位のパターンは $C > A > B$ である。なお県全体 (被調査者139人) の選好パターンも $C > A > B$ である。他の各志向性の項目ごとの選好パターンに関する説明は省略する。

3.3 価値志向性別の各地域社会の特徴

価値志向性ごとに、それぞれの地域社会の特徴をみるために、その価値志向性に属する全項目を通じてその地域社会全員の選択肢選好のパターンがどうなっているかを検討する。

検討は t -検定法によって次の手続に従って行なった。

- (1) 各個人ごとにその価値志向性に属する全項目を通じて $A > B, A > C, B > C$ の度数を数える。
- (2) その地域全員の $A > B, A > C, B > C$ それぞれの平均度数 (fo) を算出する。
- (3) 一对の選択肢の何れか一方が他方より選好されることはない (帰無仮説) とすれば、それぞれの選択肢が選好される期待度数 (fe) は項目数の半数である。
- (4) 次式によって t を算出する。

$$t = \frac{(fo - fe)\sqrt{m}}{S} \dots\dots\dots(2)$$

m サンプル数

S 標準偏差

検定の結果及び3.2の記号を用いて結果を表現したものが表7である。

表7の G_1 の時間志向性に関する資料を例として説明する。 G_1 は $m=14$ 人。項目数は6である。従って帰無仮説のもとにおける平均期待度数 $fe=3$ 。 G_1 の全員の $A>B, A>C, B>C$ の平均度数 fo はそれぞれ 1.286, 1.50, 3.643 であり、標準偏差 S はそれぞれ 0.825, 1.225, 1.009 である。これらの数値を式(2)に代入すると、 t の値はそれぞれ 7.774, 4.582, 2.384 であり、何れも $t_{0.05}$ の値より大きい。従っていずれも5%またはそれ以下の水準で有意である。

以上の結果にもとづいて G_1 では過去(A), 現在(B), 未来(C)の選好順位のパターンは $B>C>A$ として表現できる。他の地域社会の各志向性に関するパターンについては記述を省略する。

なお G_1 から G_6 までを一括した資料は表7. の県全体の欄に示してある。県全体の時間志向性を例として説明すると、 $A>B, A>C, B>C$ の平均度数 fo はそれぞれ 1.545, 1.561, 3.561 であり、標準偏差 S はそれぞれ 1.126, 1.479, 1.167 である。これらの数値を式(2)に代入すると t の値はそれぞれ 15.235, 11.471, 5.668 が得られ、いずれも $t_{0.05}$ の値より大である。故に鹿児島県民は全体としてその時間志向性において過去と現在の比較においては現在の方に、過去と未来の比較においては未来の方に、そして現在と未来の比較においては現在の方により重きをおいていると被調査者達は思っている。

従って過(A), 現(B), 未来(C)の選好順位のパターンは $B>C>A$ であると表示できる。その他の志向性における鹿児島県民全体の選好順位のパターンは

(1) 自然志向性では征服>調和>服従となっており、(2) 活動志向性では Doing>Being となっており、(3) 人間関係志向性では個人主義的關係>横の關係<縦の關係となっている。

3.4 地域社会(群)間の差異の検討

本節では表7に示した地域別価値志向性別に2選択肢の一对比較法によって算出した平均度数 fo にもとづいて、分散分析法によって、6地域社会間の差異の有無を検定する。価値志向性と選択肢対(次元)は表8に示すとおりである。

表8 価値志向性別の選択肢対(次元)

価値志向性	選 択 肢 対 (次元)
自 然	服従——調和, 服従——征服, 調和——征服
時 間	過去——現在, 過去——未来, 現在——未来
活 動	Doing-Being*
対人関係	個人——横, 個人——縦, 横——縦*

分散分析法によって算出した分散比が5%水準で有意であった選択肢対(次元)は表8の*印をつけた Doing-Being と横—縦の2次元である。分析の結果は表9.1と表9.2に示してある。

いま表9.1の活動様式志向性を例として地域社会間の差異の検討手続を記述する。項目数は全部で6である。従ってこの志向性における各人の得点範囲は0~6である。得点が3であれば、それは2選択肢の選好が等しいこと、すなわち6項目のうち3項目においては Doing の順位が Being のそれより高く、残りの3項目では逆に順位が低いことを意味する。活動様式志向性における各地域社会の $A>B$ の平均度数 fo は表6に示したとおりであった。これらの数値を分散分析法にかけたところ、表9.1に示す

ように、分散比 $F_0 (=2.38) > F_{0.05} (=2.214)$ 。よって6地域社会の間には5%水準で有意な差があるといえることができる。

次に t -検定法によってどの地域社会間に差異が存するかを調べた。その結果は表 10.1, 10.2 に示したとおりである。表 10.1 の活動志向性においては5%またはそれ以下の水準において

(1) G_4 (出水, 始良郡) は G_2 (川辺, 日置郡) 及び G_5 (曾於, 肝付, 熊毛郡) よりも Doing の方を高く評価しており,

(2) G_6 (大島郡) は G_5 よりも Doing の方をより高く評価している。

(3) その他の各地域間には Being と Doing の順位づけに差異はない。

表 10.2 の人間関係志向性の横一縦の次元においては5%またはそれ以下の水準において

(1) G_1 と G_3 はともに G_2, G_5, G_6 よりも縦の人間関係よりは横の関係を重視しており,

(2) その他の各地域間にはいずれもその順位づけに差異はない。

なお時間志向性の過去—現在及び現在—未来の2次元においては分散比 $F_{0.05}$ はそれぞれ 1.96, 2.01 であって有意ではなかったが、各地域社会の平均値を一對ずつ t -検定にかけたところ、表 10.3, 10.4 に示すとおり t の値が得られた。過去と現在の選好順位については5%またはそれ以下の水準で、

(1) G_2 は G_1, G_3, G_4 よりも過去よりも現在を重視する傾向は少なく,

(2) G_3 は G_5 と異なっていて過去より現在を高く評価している。

(3) その他の地域社会間には有意差はない。現在と未来の選好順位に関しては5%またはそれ以下の有意水準で差異があるのは G_5 と G_2 及び G_6 の間であって、 G_5 は未来より現在をより高く評価している。

上述の分散分析及び t -検定による諸結果はこれを次のように図示することができる。

2 選択肢例えば A, B の選好において完全な $A > B$ から $A = B$ を経て完全な $B > A$ に至る線上に各地域社会をその平均度数 (f_0) にもとづいてプロットし、更にその f_0 の間に有意差がみとめられない地域社会を閉曲線でつむ。図 1 ~ 4 がそれである。

3.5 各価値志向性次元における鹿児島県民の位置

本調査の対象者は県の地域農業改良普及員 (有効回答者77名) と生活改良普及員 (同62名) であり、本報告はその回答の中、“あなたが担当している地域の大多数の住民が質問項目に対してどのような考え方、意見をもっているとあなた (普及員) は思うか” という問に対する回答を整理分析したものである。

この前提のもとに、表 7 の県全体 (G_c) の欄の数値及び図 1 ~ 4 に表示した県全体の位置 (記号 K) にもとづいて、鹿児島県民が全体として表 8 の各価値志向性次元の中のどちらの選択肢を選好しているかその実状を知ることができる。

1. 自然志向性、項目数は5、項目ごとの選択肢数は3である。従って各地域社会の人々が2選

択肢例えば AB のうち、いずれか一方を選好しそれに高い順位を与えるようなことはないと仮定すれば、5 項目の半数においては A により高い順位を与え、残りの半数の項目においては B により高い順位を与える筈である。図 1～4 の×印はこの位置を示す。前述のとおり県全体の位置は記号 K で示してある。価値志向性の各次元についても同じ仮説にもとづいてそれぞれの期待値 fe を算出した。

1.1 服従—調和次元 $fe=2.5, fo=2.32, t=1.94$ である。差は有意ではない。従って県民の自然志向性における服従的態度と調和的態度は平衡しているといえることができる。

1.2 服従—征服次元 $fe=2.5, fo=1.701, t=7.051$ であって、差は有意である。従って自然に対しては服従的態度より征服的態度の方へ傾斜しているといえることができる。モンスーン地帯の特徴は自然への随順性であるといわれることがあるが、本調査の結果はそのような見解とは一致していない。

1.3 調和—征服次元 $fe=2.5, fo=1.931, t=5.942$ であって、差は有意である。従って自然との調和よりも自然に対する征服的態度を選好しているといえることができる。

以上を総合して県民の対自然志向性は征服>調和≥服従型であると表現できる。

2. 時間志向性 項目数 6, 各項目の選択肢数 3, $fe=3$ 。

2.1 過去—現在次元 $fo=1.545, t=15.235$ 。差は有意である。従って県民は過去より現在を高く評価している。

2.2 過去—未来次元 $fo=1.561, t=11.471$ 。差は有意である。従って県民は過去より未来を尊重しているといえることができる。

2.3 現在—未来次元 $fo=3.561, t=5.668$ 。差は有意である。従って県民は未来よりも現在に高い順位を与えている。

時間志向性の 3 次元（過現未）に関する検定の結果を総合していえば、この志向性における県民の特徴は現在>未来>過去型である。この点鹿児島県民に関して過去志向型、あるいは守旧型といったような固定観念が存在するが、それは本調査の結果とは一致しない。他方長期的展望に欠け刹那的であるというイメージがあるとすれば、それは本調査の結果と一脈通ずるところがあるといえないことはない。

3. 活動志向性 項目数 6, 選択肢 2。 $fe=3, fo=3.413, t=3.599$ 。差は有意である。このことから県民の活動志向性の特徴は行動、努力、成作等を高く評価する Doing>Being 型であると表現される。一般に、北方寒冷地帯と異なって、南方温暖地帯は自然にめぐまれ物産が豊かであって、住民はその恵沢になれて無為遊樂的であるという見方がある。本調査の結果からいえばそれは本県民の優勢な生活様式（生き方）ではない。前述の対自然志向性及び時間志向性に関する調査結果と併せ考えると、被調査者達は鹿児島県民の最も優勢な生活様式の特徴は現在に焦点を置き無為遊樂を抑制して積極的行動的に環境自然に立ち向っている。そのような県民像を描いている。

4. 人間関係志向性

4.1 個人主義的關係—横の關係 項目数7, 選択肢数3, $fe=3.5$, $fo=3.899$, $t=3.943$ 。従って個人主義的人間関係の方を横の人間関係よりも選好する傾向がある。

4.2 個人主義的人間関係—縦の人間関係 $fe=3.5$, $fo=4.129$, $t=4.757$ 。従って県民は縦の人間関係よりも個人主義的人間関係を高く評価している。

4.3 横の關係—縦の關係 $fe=3.5$, $fo=3.787$, $t=2.176$ 。従って縦の人間関係より横の関係を重視している。以上4.1～4.3を総合していえば鹿児島県民の人間関係の3選択肢の選好パターンは個人主義的>横>縦型である。人間関係に関して鹿児島県民は一般に縦の関係を重視する傾向が強いとか、あるいは義理人情を尊重するという見方があるが、本調査の結果はそのような一般的通念とは逆に、縦や横の人間関係より個人主義的人間関係をより重要視している、とそうように被調査者達は思っている。被調査者達の受けとり方がその担当する地域住民の大多数のものの普通一般的傾向の真実の反映であるならば、鹿児島県民の人間関係志向の選好パターンは前述のように個人主義的人間関係>横>縦型であるといえることができる。

4. 要 約

調査目的。鹿児島県民の価値志向性の把握。調査対象、地域農業改良普及員77名、生活改良普及員62名計139名。調査期間、昭和42年10月～12月。

調査票。F.クラックホーン原作、原 喜美氏翻訳改訂の価値志向性調査票。同票は対自然志向性5項目、時間志向性6項目、活動志向性5項目（実質は6項目）、人間関係志向性7項目の4志向性計23項目から構成されている。

資料。調査票の項目に対する二種の回答のうち、その担当する地域の大多数の住民の考えとして被調査者達が推定したものを採り上げた。

整理分析法。鹿児島県民を先ず6地域に区分してその地域ごとに、次に県全体について、F.クラックホーンの方式に従って整理分析を行なった。

結 果

1.1 自然、時間、人間関係の3志向性においてはその各項目の選択肢の選好順位に地域内規則性がみとめられる項目及び地域が多かったが、活動志向性においては極めて少なかった。

1.2 項目別に各地域並びに県民全体の対比較法による選択肢の選好順位パターンを探求し、またその結果を記号を用いて表現した。

1.3 次に価値志向別に各地域並びに県民全体の項目選択肢の選好パターンを探求し、併せてその結果を記号表現法を用いて表示した。有意差の有無を無視していえば、各地域及び県全体の選好順位パターンは大体 (a)自然志向性では征服—調和—服従型、(b)時間志向性では現在—未来—過去型、(c)活動志向性では Doing-Being、(d)人間関係志向性では個人主義—横—縦型である

ということができる。

2. 項目選択肢の選好パターンの地域間差異の有無について検討し、更にその結果を図示した。分散分析法の結果、活動志向性と人間関係志向性の横一縦次元において有意差がみとめられた。即ち前者に関しては G_4 は G_2, G_5 よりも、また G_6 は G_5 よりも、Doing>Being の極の方に傾斜しており、後者の横一縦次元においては G_1 と G_3 はともに G_2, G_5, G_6 よりも縦の人間関係より横の関係を高く評価する傾向が大である。以上の他、 t -検定の結果、時間志向性の過去一現在及び現在一未来の2次元において有意な地域間差異がみとめられた。即ち前者においては G_2 は G_1, G_3, G_4 よりも、また G_5 は G_3 よりも、現在>過去の極よりも、過去=現在の極（過去と現在の選好順位が等しい）の方に傾斜しており、現在一未来の次元に関しては G_5 は G_2 及び G_6 に比して未来よりも現在を高く順位づける傾向が大である。

3. 調査票の4価値志向性の各次元（をあらわす線上）における鹿児島県民全体の位置（に関する資料 f_0 ）を、どちらの極にも傾斜していない（即ち2選択肢は平等に選好されている）という仮説を立てて、 t -検定にかけた。その結果自然志向性の服従一調和次元を除いて、他のすべての志向性次元において有意性がみとめられた。即ちこれらの次元における県民の選好は、他の極よりは、下記の極の方に傾斜しているということができる。

自然志向性	征服>服従，征従>調和。
時間志向性	現在>過去，未来>過去，現在>未来。
活動志向性	Doing>Being。
人間関係志向性	個人>横，個人>縦，横>縦。

表5.1 地域別自然志向性の各項目の選択肢の選好順位の検定

項目	地域 選択肢	G ₁ m=14		G ₂ m=24		G ₃ m=16		G ₄ m=32		G ₅ m=35		G ₆ m=18	
		So ₁	ΣD ₁ ²	So ₂	ΣD ₂ ²	So ₃	ΣD ₃ ²	So ₄	ΣD ₄ ²	So ₅	ΣD ₅ ²	So ₆	ΣD ₆ ²
MN ₁ (項 4)	A	28		45		34		62		68		37	
	B	39	242	63	378	43	294	91	1385	95	1158	48	314
	C	17	S (1 %)	36	S (1 %)	19	S (1 %)	39	S (1 %)	47	S (1 %)	23	S (1 %)
MN ₂ (項 6)	A	36		58		34		71		81		40	
	B	25	98	47	182	35	38	72	338	66	186	35	26
	C	23	S (5 %)	39	S (5 %)	27	ns	49	S (1 %)	63	ns	33	ns
MN ₃ (項 11)	A	36		63		41		83		84		46	
	B	23	98	35	398	21	206	48	626	51	582	29	158
	C	25	S (5 %)	46	S (1 %)	34	S (1 %)	61	S (1 %)	75	S (1 %)	33	S (5 %)
MN ₄ (項 14)	A	35		50		26		63		76		36	
	B	23	78	48	8	28	152	58	86	60	152	30	72
	C	26	ns	46	N S	42	S (1 %)	71	ns	74	ns	42	ns
MN ₅ (項 18)	A	24		55		33		66		71		42	
	B	37	122	51	158	38	86	78	456	83	366	42	216
	C	23	S (1 %)	38	S (5 %)	25	ns	48	S (1 %)	56	S (1 %)	24	S (1 %)

注 1. mは各地域の被調査者数

2. A, B, C はそれぞれ服従, 調和, 征服を意味する。

3. S (5 %), S (1 %)はそれぞれ 5 %, 1 %水準で有意な差があることを示す。nsは 5 %水準で有意差のないことを示す。

表5.2 地域別時間志向性の各項目の選択肢の選好順位の検定

項目	地域 選択肢	G ₁ m=14		G ₂ m=24		G ₃ m=16		G ₄ m=32		G ₅ m=35		G ₆ m=18	
		So ₁	ΣD ₁ ²	So ₂	ΣD ₂ ²	So ₃	ΣD ₃ ²	So ₄	ΣD ₄ ²	So ₅	ΣD ₅ ²	So ₆	ΣD ₆ ²
T ₁ (項 3)	A	38		60		42		86		87		46	
	B	15	278	28	608	21	222	38	1176	42	1194	21	350
	C	31	S (1 %)	56	S (1 %)	33	S (1 %)	68	S (1 %)	81	S (1 %)	41	S (1 %)
T ₂ (項 5)	A	33		51		38		77		84		44	
	B	31	98	60	378	37	182	69	518	78	744	40	224
	C	20	S (5 %)	33	S (1 %)	21	S (1 %)	46	S (1 %)	48	S (1 %)	24	S (1 %)
T ₃ (項 9)	A	40		59		45		82		95		45	
	B	19	234	40	194	26	254	48	584	48	1118	31	122
	C	25	S (1 %)	45	S (5 %)	25	S (1 %)	62	S (1 %)	67	S (1 %)	32	S (5 %)
T ₄ (項 12)	A	37		63		46		81		84		49	
	B	15	266	32	482	16	456	40	914	44	1016	28	258
	C	32	S (1 %)	49	S (1 %)	34	S (1 %)	71	S (1 %)	82	S (1 %)	31	S (1 %)
T ₅ (項 15)	A	36		61		43		82		77		48	
	B	21	114	41	281	20	266	46	648	59	186	28	224
	C	27	S (5 %)	42	S (1 %)	33	S (1 %)	64	S (1 %)	74	ns	32	S (1 %)
T ₆ (項 23)	A	29		46		38		78		75		42	
	B	34	86	57	134	31	62	70	632	77	218	40	152
	C	21	S (5 %)	41	ns	27	ns	44	S (1 %)	58	S (5 %)	26	S (5 %)

注 A, B, Cはそれぞれ過去, 現在, 未来を意味する。

表5.3 地域別人間関係志向性の各項目の選択肢の選好順位の検定

項目 \ 地域 選択肢		G ₁ m=14		G ₂ m=24		G ₃ m=16		G ₄ m=32		G ₅ m=35		G ₆ m=18	
		So ₁	ΣD ₁ ²	So ₂	ΣD ₂ ²	So ₃	ΣD ₃ ²	So ₄	ΣD ₄ ²	So ₅	ΣD ₅ ²	So ₆	ΣD ₆ ²
R ₁ (項 2)	A	22	72 ns	47	2 ns	26	106 S (5%)	59	50 ns	67	26 ns	32	26 ns
	B	28		49		30		64		74		39	
	C	34		48		40		69		69		37	
R ₂ (項 7)	A	28	50 ns	47	146 S (5%)	33	182 S (1%)	53	546 S (1%)	66	73 ns	41	62 ns
	B	23		40		22		56		67		30	
	C	33		57		41		83		77		37	
R ₃ (項 8)	A	39	242 S (1%)	64	456 S (1%)	43	222 S (1%)	85	105 3.5 S (1%)	89	626 S (1%)	49	366 S (1%)
	B	17		34		22		39.5		54		22	
	C	28		46		31		67.5		67		37	
R ₄ (項 10)	A	30	14 ps	50	134 ns	34	24 ns	46	8 ns	75	258 S (5%)	39	74 ns
	B	29		55		34		66		78		40	
	C	25		39		28		62		57		29	
R ₅ (項 13)	A	23	218 S (1%)	51	158 S (5%)	28	266 S (1%)	54	342 S (1%)	52	1368 S (1%)	34	134 S (5%)
	B	21		38		23		53		58		29	
	C	40		55		45		85		100		45	
R ₆ (項 21)	A	18	150 S (1%)	30	908 S (1%)	20	234 S (1%)	51	674 S (1%)	50	888 S (1%)	26	312 S (1%)
	B	33		68		41		85		92		50	
	C	33		46		35		56		68		32	
R ₇ (項 22)	A	16	234 S (1%)	33	422 S (1%)	20	224 S (1%)	43	746 S (1%)	45	1302 S (1%)	27	182 S (5%)
	B	37		62		40		81		96		46	
	C	31		49		36		68		69		35	

注 A, B, C はそれぞれ個人主義, 横, 縦の人間関係を意味する。

表6.1.1 地域別自然志向性項目別の選択肢の一対比較法による人数

項目 \ 地域 比較		G ₁ m ₁ =14	G ₂ m ₂ =24	G ₃ m ₃ =16	G ₄ m ₄ =32	G ₅ m ₅ =35	G ₆ m ₆ =18	県全体 m=139
MN ₁ (項 4)	服>調	12	19	11	27	27	13	109
	服>征	2	8	3	7	10	4	34
	調>征	1	4	0	0	2	1	8
MN ₂ (項 6)	服>調	4	8.5	9	15.5	12	6.5	55.5
	服>征	2	5.5	5	9.5	10	7.5	39.5
	調>征	7	9.5	6	7.5	16	7.5	53.5
MN ₃ (項 11)	服>調	3	5	2	3	6	3	22
	服>征	3	5	5	10	15	5	43
	調>征	8	17	13	19	25	10	92
MN ₄ (項 14)	服>調	3	10	9	15	12	8	57
	服>征	4	11	13	18	17	10	73
	調>征	8	9	13	21	22	14	87
MN ₅ (項 18)	服>調	11	10	10	19	21	7	78
	服>征	7	6	5	11	12	5	46
	調>征	2	7	4	5	8	1	27

表6.1.2 地域別時間志向性項目別の選択肢の一対比較法による人数

項目 \ 地域比較		G ₁ m ₁ =14	G ₂ m ₂ =24	G ₃ m ₃ =16	G ₄ m ₄ =32	G ₅ m ₅ =35	G ₆ m ₆ =18	県全体 m=139
T ₁ (項 3)	過>現	1	2	1	2	6	2	14
	過>未	3	10	5	8	12	6	44
	現>未	14	22	12	28	34	17	127
T ₂ (項)5	過>現	6	15	7	14	16	7	65
	過>未	3	6	3	5	5	3	25
	現>未	3	1	2	9	8	3	26
T ₃ (項 9)	過>現	1	6	2	6	4	5	24
	過>未	1	5	1	8	6	4	25
	現>未	10	12	8	21	26	10	87
T ₄ (項 12)	過>現	0	3	0	3	6	1	13
	過>未	5	6	2	11	15	4	43
	現>未	13	19	16	28	32	9	127
T ₅ (項 15)	過>現	2	6	1	5	13	2	29
	過>未	4	5	4	7	15	4	39
	現>未	9	13	13	22	24	9	90
T ₆ (項 23)	過>現	9	16	3	13	19	9	69
	過>未	5	11	4	5	11	3	39
	現>未	2	6	7	6	12	4	37

表6.1.3 地域別活動志向性項目別の選択肢の一対比較法による人数

項目 \ 地域比較		G ₁ 14	G ₂ 24	G ₃ 16	G ₄ 32	G ₅ 35	G ₆ 18	県全体 m=139
A ₁ (項1—1)	A>B	10	10	9	20.5	12	10	71.5
	B>A	4	14	7	11.5	23	8	67.5
A ₂ (項1—2)	A>B	9	15	12	24	23	11	94
	B>A	5	9	4	8	12	7	45
A ₃ (項 16)	A>B	4	11	7	19	19	9	69
	B>A	10	13	9	13	16	9	70
A ₄ (項 17)	A>B	9	15	11.5	18.5	16	10	80
	B>A	5	9	4.5	13.5	19	8	59
A ₅ (項 19)	A>B	8.5	12	7	20.5	13	12	73
	B>A	5.5	12	9	11.5	22	6	66
A ₆ (項 20)	A>B	7	11	8	22	21	12	81
	B>A	7	13	8	10	14	6	58

表6.1.4 地域別人間関係志向性項目別の選択肢の一対比較法による人数

項目	比較	地域						県全体 m=139
		G ₁ 14	G ₂ 24	G ₃ 16	G ₄ 32	G ₅ 35	G ₆ 18	
R ₁ (項 2)	個人>横	9	12	10	17	20	12	80
	個人>縦	11	13	12	20	18	10	84
	横>縦	9	11	12	17	16	9	74
R ₂ (項 7)	個人>横	6	10	5	17	18	5	61
	個人>縦	8	15	10	26	21	8	88
	横>縦	11	18	15	25	21	11	101
R ₃ (項 8)	個人>横	3	4	1	1	11	0	20
	個人>縦	3	4	4	10	11	5	37
	横>縦	11	18	11	25.5	21	14	100.5
R ₄ (項 10)	個人>横	7	7	7	16	18	9	64
	個人>縦	5	9	7	16	12	6	53
	横>縦	6	8	5	14	11	5	49
R ₅ (項 13)	個人>横	6	7	5	17	20	8	63
	個人>縦	13	14	15	25	34	12	113
	横>縦	13	17	14	28	31	15	118
R ₆ (項 21)	個人>横	12	24	16	28	32	16	128
	個人>縦	12	18	12	17	23	12	94
	横>縦	7	4	7	7	10	2	37
R ₇ (項 22)	個人>横	14	22	16	28	34	15	129
	個人>縦	12	17	12	25	26	12	104
	横>縦	5	8	8	10	8	5	44

表6.2.1 自然志向性の各項目における地区別並びに鹿児島県民の選択肢の一対比較法による結果の記号表現

地区 項目	G ₁ m=14	G ₂ m=24	G ₃ m=16	G ₄ m=32	G ₅ m=35	G ₆ m=18	県全体 m=139
4	C>A>B	C>A>B	C>A>B	C>A>B	C>A>B	C>A>B	C>A>B
6	C=B>A*	C>B>A*	C>A>B	C>B>A	C>B>A*	C>B>A	C>B>A
11	B>C>A*	B>C>A	B>C>A	B>C>A*	B>C>A	B>C>A*	B>C>A
14	B>C>A	C>B>A	A>B>C	B>A>C	B>C>A	B>A>C	B>A>C
18	C=A>B*	C>B>A*	C>A>B	C>A>B*	C>A>B*	C>B>A	C>A>B

注 記号はAが服従, Bが調和, Cが征服を意味する。

表6.2.2 時間志向性の各項目の選択肢の一対比較法による結果の記号表現

地区 項目	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆	全 体
3	B > C ≥ A	B > C ≥ A	B ≥ C ≥ A*	B > C > A	B > C ≥ A	B > C ≥ A	B > C > A
5	C ≥ B ≥ A	C > A ≥ B	C > B ≥ A	C > B ≥ A	C > B ≥ A	C > B ≥ A	C > B ≥ A
9	B ≥ C > A	C = B > A	B = C > A	B ≥ C > A	B > C > A	B ≥ C ≥ A	B > C > A
12	B > C ≥ A	B > C > A	B > C > A	B > C ≥ A	B > C ≥ A	B = C > A	B > C > A
15	B ≥ C ≥ A*	B ≥ C > A	B > C ≥ A	B ≥ C > A	B ≥ C ≥ A	B = C > A	B > C > A
23	C ≥ A ≥ B*	C ≥ A ≥ B*	C ≥ B ≥ A	C > B ≥ A	C ≥ A ≥ B	C < B = A	C > B ≥ A

注 記号はAが過去, Bが現在, Cが未来を意味する。

表6.2.3 活動志向性の各項目の選択肢の一対比較法による結果の記号表現

地区 項目	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆	県全体
1—1	A ≥ B	B ≥ A	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B
1—2	A ≥ B	A ≥ B	A > B	A > B	A ≥ B	A = B	A > B
16	B ≥ A	B ≥ A	B ≥ A	A ≥ B	B ≥ A	A ≥ B	B ≥ A
17	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B	B ≥ A	A ≥ B	A ≥ B
19	A ≥ B	A = B	B ≥ A	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B
20	A = B	B ≥ A	A = B	B ≥ A	A ≥ B	A ≥ B	A ≥ B

注 記号はAが Doing を, Bが Being を意味する。

表6.2.4 人間関係志向性の各項目の選択肢の一対比較法による結果の記号表現

地区 項目	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆	県全体
2	A ≥ B ≥ C	A = B ≥ C	A ≥ B ≥ C	A ≥ B ≥ C	A ≥ C ≥ B	A ≥ B = C	A ≥ B ≥ C*
7	B ≥ A ≥ C	B ≥ A ≥ C	B ≥ A ≥ C*	A ≥ B > C	A ≥ B ≥ C	B ≥ C > A	B ≥ A > C
8	B ≥ C ≥ A	B > C > A*	B ≥ C ≥ A*	B > C ≥ A	B ≥ C ≥ A	B ≥ C ≥ A	B > C > A
10	C ≥ B = A	C ≥ B ≥ A	C ≥ B ≥ A	C ≥ B = A	C ≥ A ≥ B	C ≥ A = B	C > B > A
13	B ≥ A > C	B ≥ A ≥ C	B ≥ A > C	A ≥ B > C	A ≥ B > C	A ≥ C > B	B ≥ A > C
21	A > B = C	A > C > B	A ≥ C ≥ B*	A ≥ C > B	A ≥ C ≥ B*	A ≥ C ≥ B*	A > C > B
22	A > C ≥ B	A ≥ C ≥ B*	A ≥ C = B*	A > C ≥ B	A > C > B	A ≥ C ≥ B*	A > C > B

注 記号Aは個人主義, Bは横, Cは縦の対人関係の重視を意味する。

表7. 地域別、価値志向性別の選択肢選好のパターン

地域 価値志向	G ₁ m=14		G ₂ m=24		G ₃ m=16		G ₄ m=32		G ₅ B=35		G ₆ m=18		県全体(Gt) m=139										
	fo		fo		fo		fo		fo		fo		fo										
	s	t	s	t	s	t	s	t	s	t	s	t	s	t									
対自然志向	A > B	2.357	0.633	0.845	2.188	1.187	1.288	2.563	0.892	0.283	2.484	1.089	0.083	2.229	1.166	1.375	2.139	1.326	1.162	2.32	1.093	1.94	
	A > C	1.286	0.914	4.97*	1.521	1.156	4.149*	1.938	1.063	2.115	1.672	1.489	3.146*	1.914	1.56	2.222	1.694	1.362	2.511*	1.701	1.336	7.051*	
	B > C	1.857	1.292	1.862	2.021	1.166	2.013	2.25	1.291	0.775	1.641	0.969	5.015	2.086	1.222	2.004	1.806	0.86	3.424*	1.931	1.129	5.942*	
記号表現	C ≥ B ≥ A*		C ≥ B ≥ A*		C ≥ A ≥ B		C > B ≥ A		C ≥ B ≥ A*		C > B ≥ A*		C > B ≥ A		C > B ≥ A		C > B ≥ A		C > B ≥ A		C > B ≥ A		
時間志向	A > B	1.286	0.825	7.774*	1.958	0.954	5.351*	1.063	0.998	7.764*	1.375	1.07	8.591*	1.80	1.207	5.882*	1.444	1.423	4.639*	1.545	1.126	15.235*	
	A > C	1.50	1.225	4.582*	1.875	1.513	3.643*	1.125	1.258	5.962*	1.406	1.563	5.769*	1.829	1.524	4.546*	1.333	1.572	4.499*	1.561	1.479	11.471*	
	B > C	3.643	1.009	2.384*	3.208	1.062	0.959	3.688	1.353	2.034	3.688	1.177	3.307*	3.886	1.158	4.526*	3.00	1.176	0.00	3.561	1.167	5.668*	
記号表現	B > C > A		B ≥ C > A		B ≥ C > A		B > C > A		B ≥ C > A		B > C > A		B > C > A		B = C > A		B > C > A		B > C > A		B > C > A		
活動志向	A > B	3.393	1.444	1.018	3.083	1.606	0.253	3.406	1.143	1.421	3.891	1.236	4.078*	2.971	1.125	0.153	3.889	1.451	2.599*	3.413	1.353	3.599*	
	記号表現	A ≥ B		A ≥ B		A ≥ B		A ≥ B		A ≥ B		A ≥ B		B ≥ A		A > B		A > B		A > B		A > B	
	A > B	3.857	1.35	0.989	3.917	1.213	1.684	3.688	0.873	0.861	3.844	1.195	1.628	4.2	1.207	3.431*	3.611	1.289	0.367	3.899	1.193	3.943*	
人間関係志向	A > C	4.5	1.507	2.483*	3.667	1.711	0.478	4.5	1.096	3.65*	4.344	1.734	2.753*	4.2	1.828	2.265*	3.611	1.577	0.299	4.129	1.559	4.757*	
	B > C	4.571	1.284	3.121*	3.50	1.615	0.00	4.563	1.459	2.914*	4.016	1.547	1.917	3.343	1.608	0.578	3.333	1.237	0.573	3.787	1.555	2.176*	
	記号表現	A ≥ B > C		A ≥ B = C		A ≥ B > C		A ≥ B ≥ C*		A > C ≥ B		A ≥ C ≥ B		A > C > B		A > C > B		A > C > B		A > B > C		A > B > C	

注 1. 自然志向のAは服従, Bは調和, Cは征服を他方より高く順位づけたものの平均度数(fo)を示す。

2. 時間志向のA, B, Cはそれぞれ過去, 現在, 未来に関するfoを示す。

3. 活動志向のAは Doing, Bは Being に関するfoを示す。

4. 人間関係志向のA, B, Cはそれぞれ個人主義的, 横, 縦の人間関係に関するfoを示す。

5. t列の*印の数値は5%水準で有意であることを示す。

6. *印を付した記号の意味については3.2の(4)を参照されたい。

表9.1 活動志向性の Doing と Being の選好における地域間差異の分散分析

変 動 因	平 方 和	自 由 度	分 散	分 散 比	F 0.05
地 域 間	20.81	5	4.16	2.38	>2.214
地 域 内	232.15	133	1.75		
全 体	252.96	138			

表9.2 人間関係志向性系列の横と縦の選好における地域間差異の分散分析

変 動 因	平 方 和	自 由 度	分 散	分 散 比	F 0.05
地 域 間	32.49	5	6.5	2.863	>2.214
地 域 内	301.5	133	2.27		
全 体	333.99	138			

表10.1 活動志向性系列における地域（群）間差異の t ー検定

	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆
G ₁		0.617	0.025	1.126	0.988	0.964
G ₂			0.745	2.061 [*]	0.296	1.707
G ₃				1.358	1.271	1.090
G ₄					3.194 ^{**}	0.004
G ₅						2.359 [*]

*印は $t > t_{0.05}$ を示す。

表10.2 人間関係志向性系列の横と縦の選好における地域間差異の t ー検定

	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆
G ₁		2.259 [*]	0.016	1.270	2.822 ^{**}	2.757 ^{**}
G ₂			2.169 [*]	1.211	0.369	0.380
G ₃				1.204	2.693 [*]	2.639 [*]
G ₄					1.757	1.716
G ₅						0.025

注 *印は $t > t_{0.05}$ を示す。

表10.3 時間志向性系列の過去と現在の選好における地域間差異のt-検定

	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆
G ₁		2.285	0.670	0.306	1.711	0.394
G ₂			2.829 ^{**}	2.147 [*]	0.560	1.325
G ₃				0.997	2.287 [*]	0.912
G ₄					1.527	0.179
G ₅						0.907

注 *印は $t > t_{0.05}$

表10.4 時間志向性系列の現在と未来の選好における地域間差異のt-検査

	G ₁	G ₂	G ₃	G ₄	G ₅	G ₆
G ₁		1.257			0.730	1.731
G ₂			1.195	1.195	2.321 [*]	0.620
G ₃					0.507	1.623
G ₄						
G ₅						2.752 ^{**}

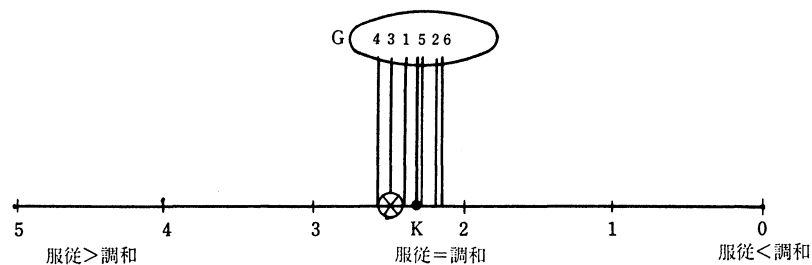
注 *印は $t > t_{0.05}$ 

図1.1 自然志向性…服従と調和の選好

- 注 1. ⊗印は $A = B$ の点を示す。
 2. 連続線上のKは県全体の平均の位置。
 3. G₁…₆は各地域社会とその平均の位置。
 4. ○線内の地域社会間には有意差がないこと、いいかえると等質であるとみなしてよいことを示す。
 5. 以下同様。

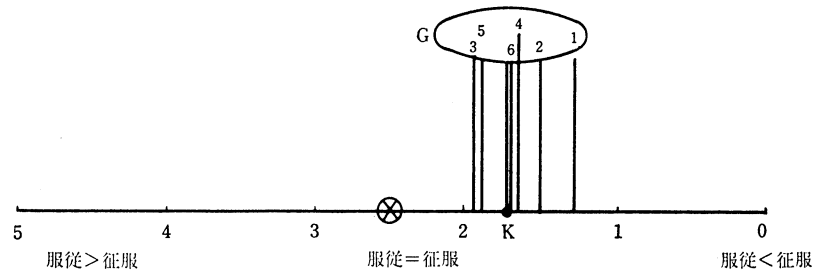


図1.2 自然志向性…服従と征服の選好

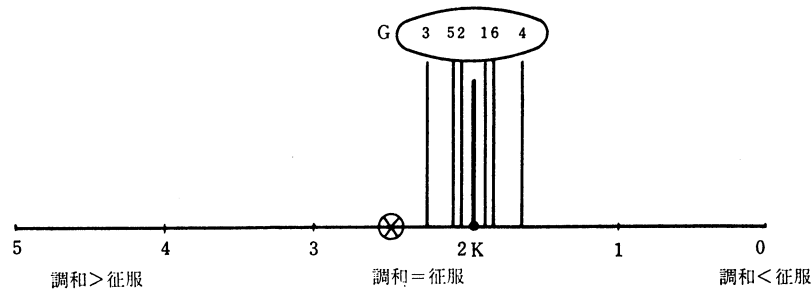


図1.3 自然志向性…調和と征服の選好

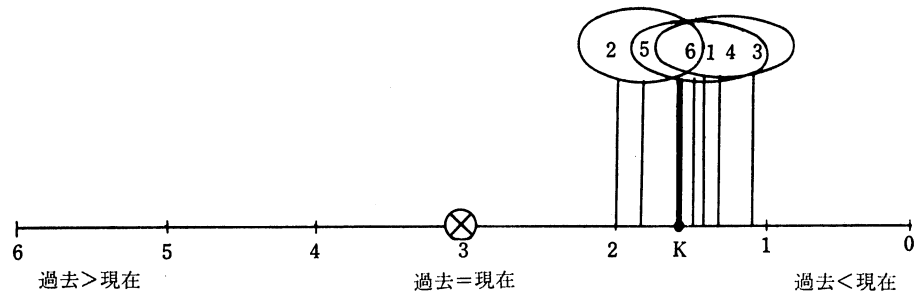


図2.1 時間志向性…過去と現在の選好

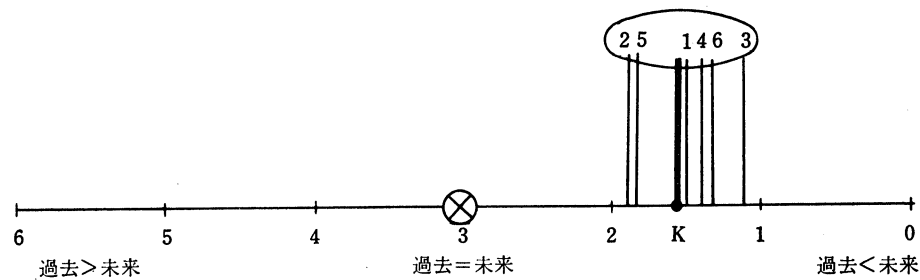


図2.2 時間志向性…過去と未来の選好

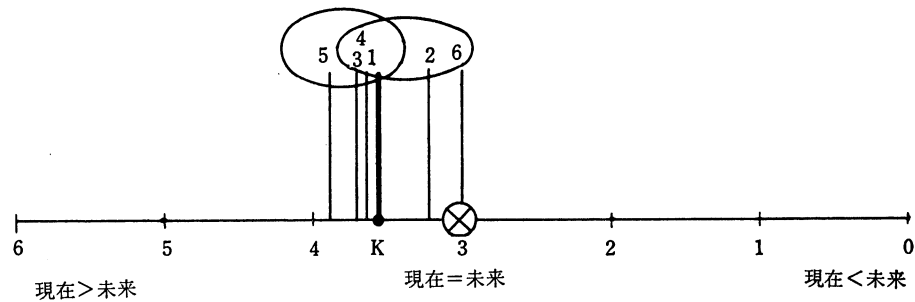


図2.3 時間志向性…現在と未来の選好

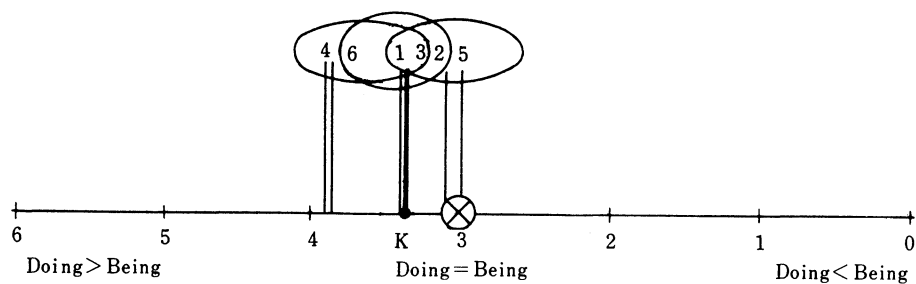


図3 活動志向性…Doing と Being の選好

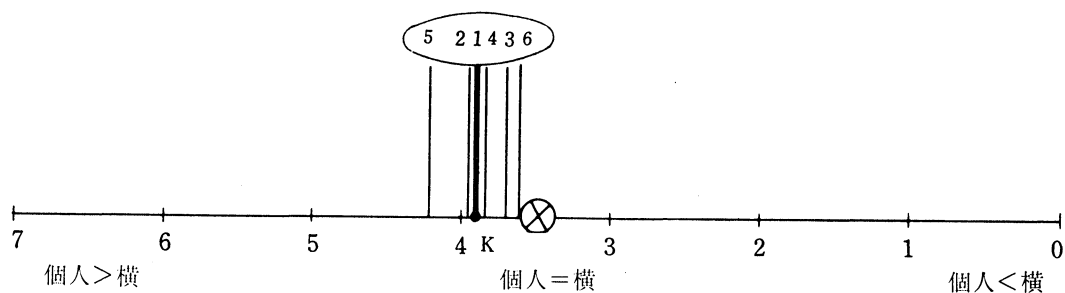


図4.1 人間関係志向性…個人と横の選好

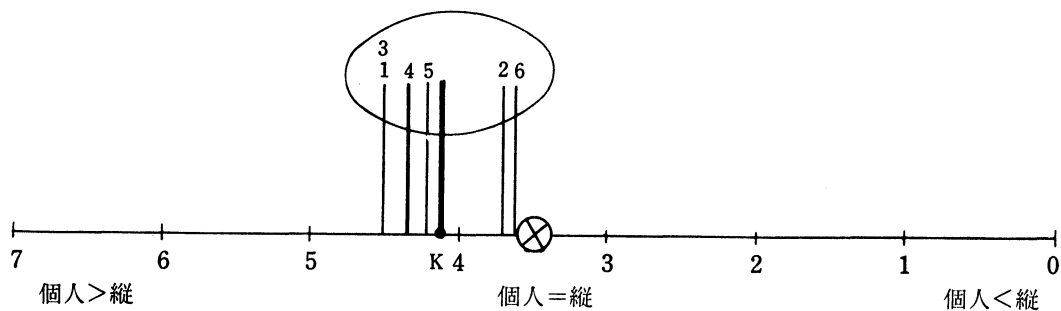


図4.2 人間関係志向性…個人と縦の選好

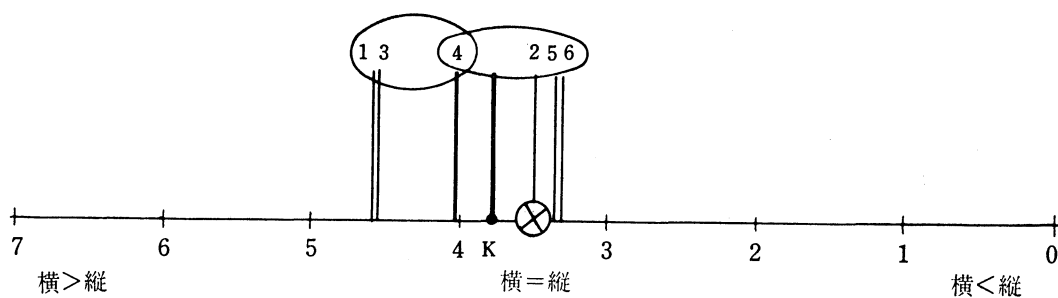


図4.3 人間関係志向性…横と縦の選好